複式簿記の誕生と宗教的レトリック

全（チョン）　在紋（ジェムン）

Ⅰ．はじめに

複式簿記は，中世イタリア商人により誕生を見た。学界において最も広く支持されている通説である。オリーゴによれば，当時のイタリア商人による複式簿記帳簿の「巻頭にはほとんどかならず，慣例に従って次のような宗教的な決まり文句が載っている。『神と聖母マリアと天国のすべての聖人の御名において』――または『神と利益の名において！』」[1]と記述されている。

こうした宗教的決まり文句の意義については，近年に至っても，「帳簿の正確性を担保するために神の力を借りていた」[2]，あるいは「神に誓って決して嘘は申しません」という証である[3]と解説されている。したがって，そうした宗教的表現は，言葉遣いの技法としては，「商人の会計記録に権威と力を投影させるためのレトリックと解釈することができる」[4]と言われている。この引用文にいう「レトリック」は，日本語でいう「比喩」と同義である。

ここに引用した両名研究者および日本経済新聞コラムに限定されない。むしろ，この種の宗教的表現に対するレトリック観は，会計学界における定説

1）イリス・オリーゴ（篠田綾子訳），『プラートの商人―中世イタリアの日常生活』，1997 年，141 頁。
2）渡邉泉，『帳簿が語る歴史の真実―通説という名の誤り―』，同文舘，2016 年，20 頁。
日本経済新聞，春秋欄，2018 年 3 月 14 日，第 1 面。
3）渡邉，前掲『帳簿が語る歴史の真実』，64 頁。
4）工藤栄一郎，「会計記録の誕生」，『企業会計』，第 70 巻第 1 号，中央経済社，2018 年 1 月，25 頁。

キーワード：複式簿記，会計言語，知の準拠枠，ソシュール，フーコー

ともいえるほどに，長らく国際的にも共有されてきた。我われはしかし，この定説に賛同できない。

さて，人間は，「家が小さすぎるとか，あの人は不作法であるとか，この食物は口に合わないと『判断する』場合，これは，一定の大きさ，作法，嗜好の基準にてらして判断しているのである」[5]。

人間はそうした判断を行使しながら，自身の知識を獲得している。知識を獲得するにあたっての，人間による判断の基準は，一般に「知の準拠枠」（frame of reference）と呼ばれている。ただし，それは普段，意識されていない。当人には身に覚えもないまま，いつの間にか「思い込み」化してしまっている。そうした判断の基準である。換言すれば，人間は事象（事物・現象）を知覚するのに，当該事象をそれ自体として，ありのままに知覚できているのではない。自身の体内に存する「知の準拠枠」を無意識の背景としながら知覚している，ということである。それは，時に「無意識の偏見」（unconscious bias）と呼ばれることもある。

その際，「枠」（frame）という言葉の表面的な語感から，当該判断の基準は獲得される知識を柔らかく〈制約〉するものとのみ解しては，不十分であろう。むしろ，獲得される知識を強く〈誘導〉してしまうもの，と解する方が近いかも知れない。少なくとも，「制約と誘導とが混然一体化した機能」を果たすもの，とでも受け止めるべきであろう。この点は本稿議論のポイントであるので，読者には十分にご留意ねがいたい。

事象の知覚内容を「図」（figure）と喩えれば，知の準拠枠は「地」（ground）に喩えられる。地の有り様は，図の内容に著しく影響する。「現実に知覚されるものは，単なる図ではなく，地との関係における図である。黄色の背景［地；執筆者注］の下に青緑に見える［図；執筆者注］折紙も，青を背景［地；執筆者注］とすれば黄緑に見える［図；執筆者注］ものである。ダンスにはじみすぎる服装も，葬式には，すこしはでとなる」[6]。

5）T. M. ニューカム（森東吾・萬成博共訳），『社会心理学』，培風館，1956年，92頁。
6）同上，91頁。

本稿は，複式簿記誕生当時における，レトリックとしての宗教的表現の意義について検討する。その際，とりわけ地（知の準拠枠）が及ぼす図（知覚内容）への影響の大きさについて，吟味するものである。そして，従来の学界有力諸説に対し，ここに，まったくの異見を呈する。ソシュール（Ferdinand de Saussure, 1857～1913）やフーコー（Michel Foucault, 1926～1984）を援用しての，構造主義会計言語論から，複式簿記誕生にまつわる有力リーディング諸説に対し，正対して異議を唱えるものである。

Ⅱ．知の準拠枠としての言語観

会計学の論文でありながら，のっけから哲学を引くことになり，どこか面はゆい。が，奇をてらうつもりは全くない。本稿の後半部では，前半部における哲学的検討の基礎の上に立ち，それに深くかかわる会計論議を提示する所存である。それゆえ，しばらくは読者の忍耐と寛容を切に願う。

存在と認識の関係をどのように見るのか？　古来，これは哲学において頂点をなしてきたテーマである。このテーマこそは，会計学を含む様ざまな理論（図）において，最基層をなす知の準拠枠（地）であろう。この準拠枠を背景として，これまであらゆる理論の言葉たちが紡がれてきた。存在と認識の関係については，大別して３種の見方に整理できよう。実在論，観念論，唯言論である。これら３種の見方は，それぞれに固有の言語観（記号観）を有している。

実在論（realism）とは，存在しているから認識できる，とする見方である。有る（存在する）から見える（認識できる）というのである。ギリシアの先哲，プラトン以来の見方（プラトニズム）である。近代科学の諸理論は，ほぼすべて，このプラトニズムを知の準拠枠としてきた[7]。いわゆる「近代会計学」の諸理論も，その例に漏れない。あえて総代をノミネートすれば，会計の歴史部門ではリトルトン（A.C. Littleton）の理論，会計の原理

7）丸山圭三郎，「言語と世界の分節化」，黒田亘ほか著，『経験・言語・認識』所収，岩波書店，1985 年，37 頁。

部門なら井尻雄士（Yuji Ijiri）の理論あたりであろうか。

実在論は，外界（自然界）の多数存在に対し，それぞれに独自の「本質」があると前提している。プラトンは，当該本質を「イデア」（idea）と呼んだ。『イデアとしての本質』は，自然的な（自然の中に備わる）もので，恣意的（人為的）に決められるものではない。そのように見られている。「イデア」の卑近例としては，本のイデア，三角形のイデア，愛のイデアその他諸々がある。哲学界でしばしば例示されるのは，「机のイデア」である。以下のように説明されている。

イデアとは「〈存在物の原形となるところの，理想的な形をもった，時間的に不変の絶対的存在〉。たとえば，机。われわれが見たりさわったりする現実の机は，キズがあったりゆがんでいたりして完全なものではない。これに対して，何か完全な，本質的な机があり，この世のすべての机はそれをまねて作られ，それによって，その作られたものが机であって，他のもの，たとえばイスや本箱ではないような，いわば《机の理想型》といったものがあると考え，これを机のイデアという」[8)]。

他方，実在論とは逆に，観念論（idealism）は，認識できるから存在している，とする見方である。見える（認識できる）から有る（存在する）のだというのである。18世紀イギリスの哲学者，ジョージ・バークリーを代表とする認識論である。

実在論者から見れば，観念論は噴飯ものの議論に見えよう。しかし，観念論を一概に排除できない事象の存在も，少なくないのである。たとえば，音波など振動数を表わす単位として，「ヘルツ」（Herz/Hz）がしばしば用いられている。人間の可聴域（個人差はあるが）は，だいたい20ヘルツ程度以上，2万ヘルツ程度以下だと言われている。20ヘルツ未満，2万ヘルツ超の音は，平均的な人間の聴音としては認識できない，ということになる。

また，ユクスキュル（J. von Uexhüll）の指摘による例証であるが，「トカゲは枯れ葉の音ならどんなにかすかなものであれひどくびくつくのに，そば

8）思想の科学研究会編，『新版　哲学・論理用語辞典』，三一書房，1995年，41頁。

でピストルを発射されても全く反応しない」[9]。人間には，トカゲなら認識できる枯れ葉の微音が認識できず，トカゲなら認識できないピストル音（爆音）には驚愕（認識）するという事例である。我われは，認識できるものなら存在を確信できそうである。しかし，認識できないものなら，その存在を確信することはかなわない。

「存在が先か認識が先か」。それは，ひっきょう，経験的には確かめることのできない形而上学の命題である。「神は存在するのか，しないのか」と同様，形而上学の命題なのである[10]。それゆえ，今日においてさえ，実在論も観念論も，いずれも厳密には経験的に真偽が検証されていないのである。いずれが正しいのか，断言できないままなのである。常識人には，何とも歯がゆい話しであろうが，さりとて断定もかなわぬ話しのままなのである。

実在論や観念論に遅れて，今から100年ほど前に現れたのが，唯言論（lingualism[11]）である。スイスの言語学者，ソシュールの創見になる主張である。唯言論によると，言葉による助けがなければ，外界は人間にとってカオス（混沌）でしかないと見られる。視覚的には，「いっさい区画のない，光と色の渦」でしかないと見られる。そのような外界が，人間にとり青い空，広い海，緑の木立等などに識別できるのは，生後習得した言葉による先導があるからだとされる。

人間は，言葉をあらかじめ習得していて後，外界を識別（認識）できるようになる。唯言論はそのように主張する。人間は言葉を知らなければ，外界は見分けのつかない存在だらけなのだという。また，聞き分けのかなわない存在だらけなのだという。換言すれば，我われ人間は，たいていの場合，「眼で見る」のではなく，「言葉で見分けているのだ」という。「耳で聞く」のではなく，「言葉で聞き分けているのだ」というのである。

9）丸山圭三郎，『文化のフェティシズム』，勁草書房，1984年，67頁。
10）ヴァリス・ドゥ（大嶋浩・坂本正彦・染谷昌義共訳），『絵でわかる現代思想』，日本実業出版社，2006年，77～78頁。
11）「言語主義」との訳出もある。次を参照されたい。
イアン・ハッキング（伊藤邦武訳），『言語はなぜ哲学の問題になるのか』，勁草書房，1989年，282頁。

実在論が正しいのか，観念論が正しいのか，あるいは唯言論が正しいのか。今日においても，実在論が言わずもがなの「常識」となっている。さらに，存在と言葉との関係を問われれば，「言葉とは，すでに存在している事物や現象に対する『名前』である」と答える。これが，実在論の言語観（言語命名論）である。実在論では，イデアが名前としての言葉の本質的な意味なのであり，それは言わば単語ごとに宿ると見られている。

実はこうした言語観こそは，古今東西，人類においてほぼ共通して抱かれてきた偏見である。人類に，ほぼ普遍的に蔓延してきた幻想である。これが，唯言論（構造主義言語論）の主張である。

念のため書き添えておけば，本稿において「単語（word）」は「文脈（context）」の〈対概念〉として用いられている。唯言論では，言葉の意味は単語ではなく文脈（コンテクスト）に宿ると見られている。言葉（単語）に対し，実在論者は超時間的に不変の意味（本質＝イデア）を愛好し，それを追い求める。彼らが言葉（単語）の意味に対し，しきりと「本質」を問題とするのは，そこに由来する。他方，唯言論者は言葉（単語）に対しては，時間制約的で可変の意味（現象）しか認めない。

ついでながら，言語というものを，もっぱら，言葉の外にある存在の〈意味〉とか〈純粋概念〉を表現する外的標識とみなす考え方がある。言語以前に思考があり，言語がなくても思考は可能であるとする考え方である。「主知主義」（intellectualisme）と呼ばれる実在論的な見方で，デカルト以来の思想（「我思う，ゆえに我あり」）である。が，ソシュールはこれをきっぱり否定している[12)]。

実在論か観念論か。両者とも経験的には検証できない形而上学の命題である。そう先述した。唯言論また，経験的に検証できない形而上学の命題にす

12）フェルディナン・ド・ソシュール（相原奈津江・秋津伶共訳），『一般言語学第三回講義―エミール・コンスタンタンによる講義記録』，エディット・パルク，2003 年，273～274 頁。
丸山圭三郎，「コノテーションと修辞」，『中央評論』（中央大学），第 132 号，1975 年 7 月，75 頁。

ぎない。もう一つ別の偏見にすぎない，とする批判も当然ありえよう。唯言論者として，我われは当該批判を甘受する。偏見でない知の準拠枠など存在しないと，自覚しているからである。

他方，実在論者や観念論者には，一般に自らの前提を偏見すなわち形而上学の命題とする自覚はない。彼ら自身の前提は，形而下的にも正当と確信されている趣きが濃厚である。この点，知の準拠枠に対する形而上学的自覚の有無については，彼我に明確な相違がある。これを事前に踏まえながら，本稿は事後の議論を進めたい。

ソシュール言語学では，記号は3種に判別されている。自然指標・人工指標・言語記号である。たとえば，『嵐』（存在）の到来を予告する「黒雲」という記号（認識記号）などは，自然指標の例である。赤・青・黄色により人びとの歩行を規制する「交通信号」などは，人工指標の例である。人間を含め，あらゆる生物は本能的に自然指標を保有して生きている。少なくとも自然指標は，実在論の言語観にも適合する記号である。

しかし，人間の認識活動に関与する記号の圧倒的な比重は，言語記号に存する。すなわち，人間の認識について言えば，自然指標によるごく僅かな比重部分を除けば，『言葉なくして認識なし』という命題がそのまま妥当する。これが唯言論の主張である。

『言葉なくして認識なし』という唯言論の命題，これを初めて聞く実在論者（観念論者を含む）には，すぐの了解は困難かもしれない。「判断の基準」すなわち「知の準拠枠」がまったく異なっているためである。しかし，当該唯言論の命題を裏付ける研究は，これまでにも既に複数存在している。古くはディドゥロ（D. Diderot）1749年の著作[13]，その後は白内障手術法考案者・ダビエル[14]や，梅津八三[15]らの報告がある。

人工指標・言語記号を保有して生きているのは，ひとり人間のみである。

13）鳥居修晃・望月登志子共著，『視知覚の形成1』，培風館，1992年，17頁。
14）池田清彦，『構造主義科学論の冒険』，毎日新聞社，1990年，38頁。
15）梅津八三，「先天性盲人の開眼手術後における視覚体験」，『児童心理と精神衛生』，第2巻第4号，1952年2月，4頁。

他の動物には，それら記号は保有されておらない。それら動物には，「交通信号」もなければ，「よい」とか「わるい」とかいった意味の記号や言葉も存在しない。

本稿はソシュール同様，人間だけが保有する言語記号（人工指標を含む[16]）に限定して，議論する[17]。本稿論題「複式簿記の誕生と宗教的レトリック」における普通名詞も形容詞も助詞も，すべて言語記号である。自然指標は，ここには皆無である。論題ばかりか，序論から結論に至るまで，本文全体が言語記号により記述されている。それゆえ，本稿会計研究において用いられている記号はすべて，自然指標ではなく，言語記号である。しかも，知の準拠枠は，パーフェクトに唯言論を背景にしている。実在論や観念論には，必要な場合を除いて，いっさい関与しない。

記号の種別とは別に，部分と全体の関係について，これまで見方に2つの対立があった。原子論（atomism）と全体論（holism）である。全体はその部分の総和であると前提して，議論の展開をはかる見方がある。「原子論」という。これに対して，全体はその部分の総和をもってしては説明できない，独自の自律性（自存性）を有するとする見方がある。「全体論」という。後者の見方は，「はじめに全体ありき」という捉え方である。複数ある言語外存在に対して，実在論・観念論は，それらを原子論的存在と見立てる考え方である。唯言論は，それらを全体論的存在と見立てる考え方である。

コトバの意味（本体）をオリジナル，コトバをそのコピー（写体）とするならば，実在論も観念論も，内容的には共に「反映論」（写像論）と見られよう。実在論は，認識が存在（オリジナル）をコピー（反映ないし写像）しているとする見方である。観念論は，逆に，認識の方をオリジナルとし，存在の方をコピー（反映ないし写像）とする見方である。実在論でも観念論でも，暗黙のうちにオリジナルとコピーは「一対一で対応」（one-to-one

16）人工指標の意味（概念）は，発生的には，言語記号の所産だからである。次を参照されたい。
丸山圭三郎，『ソシュールを読む』，岩波書店，1983年，199～200頁。
17）全在紋，『会計言語論の基礎』，中央経済社，2004年，8～9頁。

correspondence）するものと前提されている[18]。

人間のコトバは例外なく，どれも語彙と文法からなっている。語彙（単語の集合）は体系（全体としてのシステム）をなしている。日常言語（日本語，英語，フランス語など等）は，それぞれに「固有の体系」を保有している。種類の異なる日常言語相互間では，語彙に内属する諸単語のそれぞれは，たしかに「一対一で対応」しておらない。「固有の体系」云ぬんについては，この点だけでも，論より証拠である。

たとえば，日本人や韓国人は『蝶』と『蛾』を区別するが，フランス人には区別がつかない。日本語や韓国語でいう『蝶』も『蛾』も，彼の地では「papillon」一語で括られてしまっているからである。日本人や韓国人の子供たちは，『蝶』を見たら可愛いとばかりに〈追いかける〉。『蛾』を見たら汚らしいと〈追い払う〉。対照的な反応の違いを見せる。コトバの意味（概念）の，区別あってこその反応の違いである。

他方，フランス人は子供たちも含めて，『蝶』と『蛾』に対し，同じように反応する。反応に違いは起きない。両者を区別する複数のコトバ（単語）が存在しないためである。また，フランス人は『犬』と『狸』の区別もつかない。両者に対し，フランス語は「chien」一語しか持たないからである。

日仏間での，こうしたコトバ（単語）の意味のズレは，言語記号の意味が完全に恣意的（人為的）であることを示している。フランス語の意味は，フランス人たちによる言語使用の中で可変的（人為的）に決定される。日本語の意味は，日本人たちによる言語使用の中で可変的（人為的）に決定される。

実在論や観念論における記号観のもとでは，記号と記号の意味とは「一対一で対応」することにより，自然的（不変的ないし非人為的）に決定されるものと想定されている。意味のルーツ（始源）は，非人為的な自然に対する〈発見〉に求められる。「イデア」がしかりである。「言語命名論」は，記号と記号の意味とが「一対一で対応」するという記号観（言語観）である。それは，実在論と同調すると，上述した「主知主義」を生む。

18）丸山圭三郎，『カオスモスの運動』，講談社，1991 年，30 頁。

唯言論の記号観のもとでは，記号と記号の意味とは，恣意的（可変的ないし人為的）に決定されるものと想定されている。意味のルーツは人為的で非自然的な〈発明〉に求められる。実在論や観念論による記号観と，唯言論の記号観との根本的な違いは，ここにある。

ついでながら，意味を伝達するための言葉は，人間以外の群生動物にも存在する。蜂やイルカは，「ダンス」を言葉に，仲間うちでコミュニケーションをはかるという。ゴキブリは「臭い」を言葉に，仲間うちでコミュニケーションをはかると聞く。ただし，人間以外の群生動物における言葉の特性は，言葉と言葉の意味とが「一対一で対応」することにある。そうした彼らの一義的な言葉を「シグナル」（signal）と呼んで，人間に特有の多義的な言葉を「シンボル」（symbol）と呼ぶ語法もある[19)]。

長時間の労働や勉学により，人間にはストレスが溜まる。すると，日本人なら「肩が凝る」が，欧米人の場合は「背中が痛くなる」（I have a pain on the　back）とのことである。何年か前，日本で『ベルギー人は肩が凝らない』という書名の本がヒットした。執筆者は，ベルギー人の先生からフランス語を学んだという日本人である。彼の先生，ストレスが溜まれば，以前は背中が痛くなっても，肩が凝ることはなかったとされる。

その先生が，来日して日本語を勉強し，「肩が凝る」という日本語に接した。当初は辞書を引いても，その意味が理解できなかったようである。それでも，日本語の勉強を続け，他の日本語語彙との関連（体系）を学びながら，やがてその語の意味が了解されるに至ったという。それから後は，ストレスが溜まると，その先生は『肩が凝る』ようになったという[20)]。「肩が凝る」という言葉が，肉体的な『肩凝り』という存在を生むようになったという次第である。「はじめに体系（全体）ありき」，「はじめにコトバ（語彙＝体系）ありき」により，生起する現象と見られよう[21)]。

19）丸山圭三郎・黒鉄ヒロシ，『人はなぜ死を恐れるのか』，精文堂，1994年，60～62頁。
20）飯島英一，『ベルギー人は肩が凝らない』，創造社，2000年，1頁。
21）かつての本務校で出会ったアジア人留学生に，確かめてみた。「肩が凝る」でも

日常言語ばかりでない。同様の現象は，会計言語における語彙（体系）の違いの中にも見出される。たとえば，開発費など『繰延資産』は，日本の制度会計（収益費用観）下では生起するが，欧米の制度会計（資産負債観）下では生起しない。これもまた，「はじめにコトバ（語彙＝体系）ありき」により，生起する事象の相違例である。

前述のとおり，今日においても「実在論」が我われ人間社会の常識である。それは圧倒的多数者に存する「知の準拠枠」となっている。ならば，読者一般におかれても，仮令その身に覚えはなくても，ほぼ実在論を知の準拠枠にしておられることとなろう。

実在論者には，他の実在論者の言うことであるならば，知の準拠枠を同じくしていることで，話しは「分かりやすい」。実際は曲論であっても，正論に聞こえやすい。逆に，観念論者や唯言論者らによる話しの場合には，知の準拠枠の違いから「分かりにくい」。そのため，彼らの正論も聞き逃されがちである。この点，実在論者とおぼしき読者には，あらかじめ注意と警戒を求めておきたい。

Ⅲ．権力の類型と知の準拠枠

ソシュールは，語彙により構成される「文」を，言語分析の主要な対象とした[22]。言語に対するフーコーの着眼は，基本的にはソシュールに拠っている[23]。ソシュールもフーコーも，言語が対象とする世界はカオス（混沌）であること，それを前提にしている[24]。ソシュールは「文」を主要な分析対象

なく，「I have a pain on the back」でもなく，中国人の場合は「腰酸背痛」（腰がだるくて背中が痛い）のだそうである。韓国人の場合は「뒷골이 당긴다」（頭の後が引きつる）のだそうである。在日韓国人二世である筆者の場合は，「肩が凝る」。母語（日常言語）の違いが，ストレス出口の差となっている。

22）児玉徳美，『ことばと認識』，開拓社，2013 年，14 頁。

23）中村雄二郎，「哲学の言葉と言葉の哲学」，『思想』，第 572 号，1972 年 2 月，154 頁。

24）サラ・ミルズ（酒井隆史訳），『ミシェル・フーコー』，青土社，2006 年，94～95，115 頁。
フーコーは，ソシュールの最も正統的な後継者，との評がある。次を参照せよ。池田清彦，『構造主義生物学とは何か』，海鳴社，1988 年，116～117 頁。

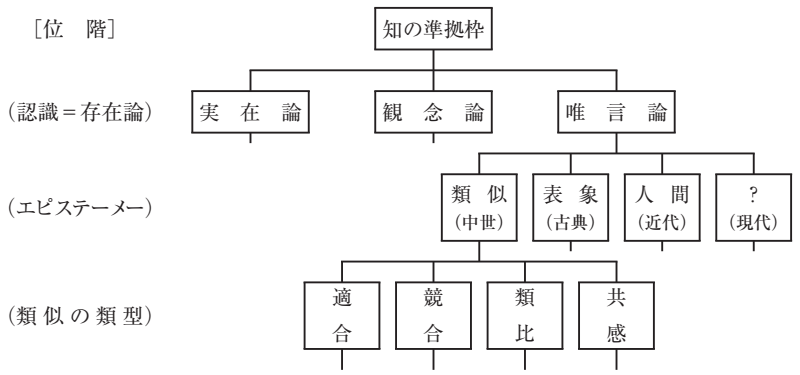
としたが，フーコーはむしろ，「文」と「その他の文」との〈関係〉すなわち〈言説〉（discours）を主要な対象とした[25]。

ソシュールは「文における語の意味」を問題にしたが，フーコーは「言説（文と文との関係）における語の意味」を問題にした。ソシュールとフーコー，両者の言語観に共通するのは，「意味は自然よりも人為の所産」というに尽きる[26]。意味の所在は「コトバと自然との間の対応（指示）」よりも，「コトバと人為との関係（文化）」の方にある，との言語観からである。

フーコーはソシュールの言語観（意味関係観）を踏襲しながらも，独自の社会思想論を展開した。それを一言でいえば，「〈知〉と〈権力〉は一体」というものである。彼によれば，新しい権力（power）は必ず新しい知識（学問・科学）を随伴するとされた。知はしょせん権力の僕（しもべ）でしかない。それゆえ，学問における「真理」は，その時代・その社会に支配的な権力次第である，と見られた。中立的で，普遍的で，超歴史的な真理など存在しない，との見方である。

フーコーによれば，人間の認識（知）のあり方には，いつの世も一定の基

図表1　本稿「知の準拠枠」の位階



25）中川久嗣，『ミシェル・フーコーの思想的軌跡』，東海大学出版会，2013年，62頁。
26）難波江和英・内田樹，『現代思想のパフォーマンス』，松柏社，2000年，108～109頁。

本的なパターンがあるとされた。当該パターンを，フーコーは「エピステーメー」（épistémè）と呼んだ。日本語では，しばしば「知の枠組み」とか「知の準拠枠」（frame of reference）とか，訳出されている。あるいは，「知の深層の基本形」と注記されることもある[27]。「エピステーメー」は，クーン（Thomas Kuhn）のいう「パラダイム」（paradigm）と通底している[28]。

ちなみに，「知の準拠枠」には〈位階〉があることに留意したい。上位クラスと下位クラスの分別である。前頁の**図表 1**（本稿「知の準拠枠」の位階）を見取り図としながら，議論を進めたい。

我われは「知の準拠枠」として，「存在と認識の関係」（認識＝存在論[29]）に対する 3 種見方（実在論・観念論・唯言論）から筆を起こした。本稿は，当該「知の準拠枠」が最基層すなわち最上位のクラスをなすものと措定している。フーコーが具体的に特定したエピステーメー（類似・表象・人間；後掲**図表 2** 参照）は，「知の準拠枠」としては，最上位 3 種見方よりも下位クラスにあり，かつ最上位 3 種見方に次ぐ二番手上位クラスに位置付けられよう。本稿はこうした位階観のもとで，筆が進められる。

すなわち，フーコーによる 3 つのエピステーメー（類似・表象・人間）は，「知の準拠枠」としては，唯言論を直属の上位クラスとしつつ，相互に共属下位クラスを構成する準拠枠をなすと考えている。位階は，さらに多段階で別種の下位クラスへと分別されうる。たとえば，フーコーにおいては，中世の「類似」というエピステーメーは，再び適合・競合・類比・共感という 4 種の下位クラス言説へと類型化されている[30]。会計学説においても，知の準拠枠をなす言説として，類似の多段階クラス編成が見られる。我われは以下の脚注箇所[31]でそれに言及している。

27）大黒弘慈，『模倣と権力の経済学』，岩波書店，2015 年，5 頁。
28）クリス・ホロックス；ジョラン・ジェヴティック（白仁高志訳），『フーコー』，現代書館，1998 年，65 頁。
29）丸山圭三郎，『文化＝記号のブラックホール』，大修館，1987 年，38 頁。
30）ミシェル・フーコー（渡辺一民・佐々木明訳），『言葉と物』，新潮社，1974 年，42～49 頁。
31）全在紋，『会計の力』，中央経済社，2015 年，190～191 頁。

閑話休題。フーコー権力論は，近現代における権力の解明に重点が置かれた。彼は「歴史学」と「系譜学」とを識別し，前者ではなく後者の学に基づいて，権力の変遷に関する時代区分を試みている。とかく，「歴史学」は，諸事象を時間的に過去から現在へと平坦につなげるきらいがある。フーコーは，この方法を嫌ったのである[32)]。

それゆえ，彼の権力論における時代区分は，「歴史学」ではなく「系譜学」によっている。彼の時代区分は，時間的には，せいぜい中世・ルネッサンス時代にまで遡るだけである。それ以前の人類史，たとえばギリシアやローマの時代については，あまり触れられていない。それら古代には，近現代に特徴的な権力の実態を解明するのに不可欠な，別種権力類型を見出せなかったためかと思われる[33)]。

知と権力の一体性を解明すべく，フーコーは，エピステーメーの変遷を基軸とした時代区分をものした。区分された時代は4つである。中世（プレ古典主義時代），古典主義時代，近代，現代（ポスト近代）である。

それらについては，これまでにもフーコー自身およびフーコー研究者らによる関連論稿が多数公刊されている。それら時代区分・エピステーメー（言語観）・政治体制の基調について，本稿これより先の議論における羅針盤となすべく，一覧提示しておく。次頁**図表2**のとおりである。

フーコーのいうエピステーメーは，時代区分ごとに変転している。断絶的にがらりと変転するものであり，当該知の準拠枠は，経験により検証できるものではない。むしろ経験に先立つ，ア・プリオリな見方（前提）であるとされる。エピステーメーは，普段は，学者や研究者自身にも自覚されていない前提，すなわち「無意識（深層意識下）」の前提を指す[34)]。

そうしたア・プリオリな前提としてのエピステーメーを発掘する学問，フーコーはそれを「考古学」（archéologie）と呼んだ。ついでながら，「考

32）竹内洋，『社会学の名著30』，筑摩書房，2008年，78頁。
33）ガリー・ガッティング（井原健一郎訳），『フーコー』，岩波書店，2007年，147頁。
34）丸山圭三郎，『欲動』，弘文堂，1889年，147～148頁。

図表２　フーコー時代区分に存する知の準拠枠と権力類型

時　代　区　分	エピステーメー	政　治　体　制
中世（プレ古典主義時代） 16 世紀以前	類　似 （意味類似観）	地　方　権　力 （貴族・教会・自治都市）
古典主義時代 17 世紀・18 世紀	表　象 （意味実体観）	君　主　権　力 （絶　対　王　政）
近　代 19 世紀初頭以後	人　間 （意味実体観）	国　民　主　権 （国　民　国　家）
現代（ポスト近代） 20 世紀末葉以後	?	グローバリズム［新自由主義］ （小　さ　な　政　府）

古学」という語の意味も，一般とフーコーとでは異なっている。ダーウィンの「進化論」に典型的であるが，考古学は押しなべて，歴史を連続的な進歩（進化）の過程と見て著述される。しかし，考古学に対するフーコーの構想は，そうした著述とはまったく異なっている。彼のいう「考古学」において探究される〈知の準拠枠〉は，時代や社会ごとに《断絶》されている。歴史は，連続的な《進歩（進化）》の過程とは見られていない[35]。

フーコーは「知と権力の一体性」を前提に立論している。この場合の「知」には，哲学・物理学・会計学など，いわゆる「学問」も含まれる。学問が人びとに広く承認されるには，何よりも体系的な思考を基礎にしていなければならない。その際，思考は何よりも先ず言語により表現される必要がある。言語で表現されなければ，思考の成果は学問として社会の人びとに共有化されえないからである。

人間の思考を「水」になぞらえるならば，言語は思考という水の流れる「水路」とたとえられよう[36]。すなわち，言語は，思考が言語という水路から逸脱して流れることを許そうとしないのである。換言すれば，思考は言語

35）フーコー（渡辺・佐々木訳），前掲『言葉と物』，21 頁。
36）李奎浩（丹羽篤人訳），『言葉の力―言語哲学―』，成甲書房，1981 年，7 頁，96 頁。

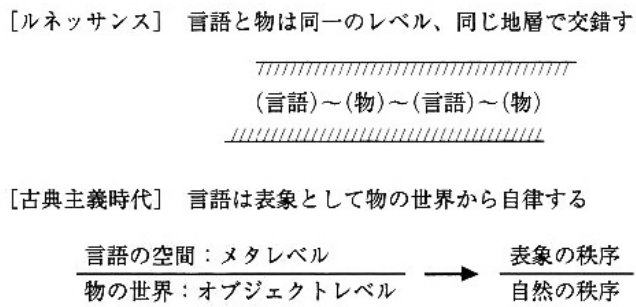
の捕囚なのである。

言語は水路として，言わば，一体としての知と権力との〈媒介項〉ということになろう。人間の住む社会において，そもそも水路は人為的な目的なしに設えられることはない。すなわち，言語（水路）は，権力が目指すもの（目的）なしに作られることはない。されば，人間の言語は何時の世も，《権力汚染言語》（*power pollution language*）だということになろう。

図表2に提示したとおり，フーコーによれば，16世紀以前（中世）のエピステーメーは，「類似」（ressemblance）である。当時，真理は概念間の〈類似〉に存すると見られた。ただし，真理は〈神〉のものであった。昨今の常識が前提するような，〈人間〉が発明・発見するものではなかった。中世においては，人間が真理に到達するためには，神が地表に残してくれた可視的な標識の中に，類似したものを見出せばよかった[37]。人間は神が残してくれた標識（記号）を目じるしとし，概念間の類似を読み解く。それにより初めて神の定めた真理が会得できる。そのように見られた。

内田は，中世・ルネッサンス期と古典主義時代の言語観の違いを，**図表3**のように図解している[38]。

図表3　中世·ルネッサンス期と古典主義時代との言語観の違い



37）フーコー（渡辺・佐々木訳），前掲『言葉と物』，58頁，61頁。
38）内田隆三，『ミシェル・フーコー』，講談社，1990年，69頁。

内田の解説によれば，中世・ルネッサンス期においては，言語と物（言語の指示対象）とは同一のレベル，共に同じ地層で〈類似〉により交錯するものと見られた。我われは，この時期のエピステーメーにおける言語観を，さしあたり「意味類似観」と呼んでおく。

たとえば，トリカブトという植物は，眼球に類似しており，人間の眼病に効くことがある。トリカブトの種子は，白い薄膜の中にはめこまれた黒っぽい小さな球である。その薄膜は，ほぼ眼球にたいする瞼（まぶた）の位置を占めている。すなわち，薄膜と瞼とは似ているから，眼病に効くと思われたのである。また，胡桃（くるみ）と人間の頭との類似関係についても，同様であった。胡桃の骨（すなわち固い殻）は，人間の頭蓋骨（ずがいこつ）に似ている。そして，クルミの実は人間の脳髄に似ているので，頭の内部の病はその実により予防される。中世の人びとは，類似関係からそのように読み解いた。

フーコーは，「トリカブトと眼のあいだには共感がある。けれども，もしこの植物に，それが眼病に効くことを語る外徴，標識，言葉のようなものがなかったならば，この意外な類縁関係は知られずにおわるであろう」[39]として，意味類似観に肯定的側面のあることを指摘している。

神崎の解説によれば，中世における「類似性の重視は，『人々の習慣として，二つのもののあいだに何らかの類似を認めるたびに，両者の事実上の相違に関してさえ，一方において真と確かめた事柄を，両者についても言い立てる』と，デカルトが『精神指導の規則』の冒頭で述べているような事態にまで到達する。たとえば，双子はよく似ているが，仮に違った側面があったとしても，それは隠れていて，いつかはその双方に発現すると考えるのである」[40]。デカルトは，意味類似観の否定的側面を摘発したというわけである。

39）同上，52 頁。
40）神崎繁，『フーコー　他のように考え，そして生きるために』，日本放送出版協会，2006 年，22 頁。

Ⅳ.「複式簿記」のイデア

やがて，時代（エピステーメー）は変わった。古典主義時代の人びとにとって，中世・ルネッサンス期のエピステーメー（類似）は，物笑いの種に転じた。騎士のドン・キホーテが好例とされた。中世人・キホーテは，〈類似〉をもとに世界を解読しようとした。家畜を見て軍勢に，女中を見て貴婦人に，旅籠屋を見て城に，風車を見て巨人に類似していると見た。

そうした見方を，デカルトはじめ，古典主義時代の人びとは笑ったのである。じっさい，中世において騎士道物語は数多く登場したとのことである。しかし，安藤によれば，M・セルバンテスの著作『ドン・キホーテ』（前編＝1605年/後編＝1615年）が刊行されて以降，新しい騎士道物語はほとんど出版されなくなったという[41]。騎士道物語は，流行（はや）らなくなったのである。フーコーによれば，それはエピステーメーが変化したためである。

もともと，「言語」（記号）というものは「意味」をもつ。換言すれば，「意味」をもたなければ，それは「言語」（記号）ではない，ということになる。これを踏まえて，先のトリカブト眼薬観や胡桃頭病予防観に見られる意味類似観について，我われ自身になる解釈を示そう。

中世・ルネッサンス期においては，たとえば「クルミの堅い殻」と「頭蓋骨」は〈類似〉していると見られた。この場合，「クルミの堅い殻」を言語（記号）とみれば，「頭蓋骨」は物（言語の指示対象＝意味）ということになる。また，「頭蓋骨」は，しばしば「髑髏（どくろ）」と呼ばれる物（言語の指示対象）に〈類似〉していると見られる。すると，物（言語の指示対象）だった「頭蓋骨」は，「髑髏」との関係において，今度は言語（記号）へと転ずる。さらに，「髑髏」もまた言語（記号）に転じて，しばしば「人間の死」を物（言語の指示対象）とする関係を持つことがある。

つまり，「頭蓋骨」は「クルミの堅い殻」を言語（記号）とする物（言語の指示対象）であるばかりでなく，「髑髏」の仲介を経て，やがて「人間の

41）安藤美紀夫，「解説」，ミゲル＝デ＝セルバンテス（安藤美紀夫訳），『ドン＝キホーテ』，講談社，2011年，262頁所収。

死」を物（言語の指示対象）とする言語（記号）ともなりうる。このような解釈（連想）を連ねてゆけば，今やトリカブト眼薬観や胡桃頭病予防観も，我われの腑に落ちる。神と人間との関係からすれば，言語と類似的にその〈意味〉となる物（言語の指示対象）とは，同一のレベルにあり，共に同じ地層で交錯していると見られよう。

中世のエピステーメーは「類似」であったが，古典主義時代にそれは，「表象」（représentation）へと転じ，近代には「人間」（l' homme）となった。**図表 3** によれば，古典主義時代の言語観は，「言語は表象として物の世界から自律する」というものであった。言語すなわち表象の秩序と，物すなわち自然の秩序とは分断される，との見方である。

我われの理解によれば，言語観として，言語の秩序と自然の秩序とが分離されるという見方は，近代も古典主義時代と変わらない。ただし，語彙（単語の集合）の点では変化した。我われの解釈である。

ソシュール言語学によれば，人間の言葉（言語記号）の意味（価値）は，どのような言語であっても，連辞関係（rapport syntagmatique）と連合関係（rapport associatif）とがクロスするところで画定される[42]。すなわち，言葉の意味は，単語には宿らない。文脈（コンテクスト＝関係）次第だというわけである。ある語の意味は，単語それ自体の中にはなく，それと対比される他の語（群）との〈差異〉[43]により決まる，というのである。

たとえば，阿刀田の著述に「きしゃのきしゃ，きしゃできしゃした」という一文がある[44]。4 つの同じ「きしゃ」という日本語単語音声の意味は，漢字で示せばそれぞれ『貴社』，『記者』，『汽車』，『帰社』となる。それぞれ意味が違っている（多義的である）のは，意味というものが単語（きしゃ）それ自体の中にはなく，文脈（日本語連辞関係）で決まるためである。

42）ソシュール言語学における「連辞関係」と「連合関係」の意義，およびそれらの会計言語との関わりについては，下掲拙著を参照されたい。
全在紋，前掲『会計の力』，9～13 頁。
43）佐久間淳一，『本当にわかる言語学』，日本実業出版社，2013 年，20～22 頁。
44）阿刀田高，『ことば遊びの楽しみ』，岩波書店，2007 年，6 頁。

手近にある英和辞典（ENGLISH-JAPANESE DICTIONARY）を見て確認したい。いわゆる重要度（多用度）の高い単語（たとえば「中学基本語」）ほど，品詞も語義も相互に無関係に見えるのに，同一スペルの箇所に数多い解説が混載されている！ この英単語にある解説のうち，日本語の訳語として相応しいのは，一体どの意味か？ 初学者ほど迷うことが多い。それも，品詞や語義の特定が，単語にあらず文脈次第ゆえである。

言語には，音声言語（話し言葉）と文字言語（書き言葉）の別がある。言語の基本は前者である。後者のない言語はあるが，前者のない言語はないからである[45)]。諸説あるが，いま地球上で，音声ある言語は 3000 種から 4000 種，そのうち文字を有する言語となると 200 種超にすぎないそうである。上で引いた英和辞典は文字言語例である。スペルは違っていても，発音が同じ英語も多い。まして，文字をもたない音声言語のみの言葉まで含めて勘案すれば，言葉の意味が単語よりも文脈でしか決まらない阿刀田著述のような事例比は，一挙に高まることであろう。

「上」という語（概念）がなければ，「下」という語（概念）も存在しえない。逆もまた真である。「右」という語（概念）がなければ，「左」という語（概念）も存在しえない。これの逆もまた真である。

さらには，規模の大小を表わす概念に「大」「中」「小」という 3 語がある。「中」という語（概念）は，「大」および「小」という関連（対比）語群（概念）なしには存在しえない。「中」という語（概念）は，「大」および「小」という関連（対比）語群（概念）との共存を前提にして初めて，「中」という語（概念）の意味が画定される，という相対関係である。

さらには，「上」，「下」，「右」，「左」，「大」，「中」，「小」にかぎらず，体系をなす語彙に存するすべての単語間における相対的な差異により，単語それぞれの関係的な意味（価値）が相対的に定まる。「複式簿記」という語句（複数単語）の意味も，ここに包摂される。これが，ソシュール言語学における連合関係論の要諦である。

45）黒田龍之助，『はじめての言語学』，講談社，2004 年，40 頁。

日常言語であれ会計言語であれその他言語であれ，同種言語内であれば，古典主義時代も近代も，連辞関係（文法）は，あまり変化しない。しかし，連合関係（語彙の体系）においては，見過ごせない変化がしばしば生起する。エピステーメー次元における顕著な例としては，近代では「人間」を認識対象とする言説が含まれているのに，古典主義時代においては含まれていなかった，といったことが挙げられよう。

たとえば，「人間」を認識対象に含めた「生物学」は，近代に特有の学問であった。古典主義時代には，人間は認識対象とされない「博物学」が存在したのみである。人々により，今日では存在していて当然と広く認知されている「生物学」ではあるが，古典主義時代当時は存在しなかったのである[46]。また，会計学で言えば，人間を認識対象とする「人的資源会計論」や「退職給付会計論」は，せいぜい 20 世紀近代以降において特有の言説であったにすぎない[47]。

学問（生物学や会計学）よりも広義に，社会的な意味合いからも，人間を認識対象とした言語問題について少し触れておこう。言語学者チョムスキーをはじめ，現代のマスコミ一般においても，こんにち「人権」や「民主主義」は普遍的価値すなわち超時代的価値をもつと見られている。いつの世も時代を超えて，「人権」や「民主主義」は常に尊重されてしかるべきだとの考え方である。これなど，フーコー的には，無意識のうちに，近代のエピステーメーに囚われた言説ということになろう。

「民主主義」への論及は他日に期することとし，ここではまず，「人権」という言葉の意味を糺しておこう。「人権」を重要視するようになったのは，近代すなわち「生の権力の時代」以降にすぎない。プレ近代すなわち「死の権力の時代」には，権力者に逆らう人間（被支配者）は簡単に殺害された。それが慣わしであった。

プレ近代（古典主義時代）以前にも，〈認識主体〉としての人間は存在し

46）竹田青嗣，『人間的自由の条件』，講談社，2004 年，353 頁。
47）全在紋，前掲『会計の力』，192～197 頁。

た。しかし，〈認識対象（認識客体）〉としての人間は，存在しなかった。認識対象としての「人間」を意味する言葉がなかったからである。言葉なくして認識はないので，認識対象としての人間の権利すなわち「人権」など，プレ近代以前には，人口の歯牙にもかからなかった。たとえば，日本の江戸時代（フーコー的には古典主義時代），百姓たちに「人権」が認められていたという話し，聞いたためしがあるだろうか。

人権問題が論議されるようになったのは，近代に入ってからにすぎない。人間（被支配者）は殺すよりも生かしておくことが，権力者にとり実入りが大きくなる（収奪を増やせる）と認識されたためである。ただし，権力者にとって，被支配者に対する「人権」という言葉は，外見上の美辞にすぎない。その真意は，『太らせて喰うべき家畜に投げ与えた，虚飾言辞』にすぎない。

フーコー的に言えば，近代になって無から新たに生じた概念は，ポスト近代で消え去っても何ら不思議でない。フーコーによれば，認識対象としての人間概念は，近代になって発明されたものでしかない。「そしておそらくその終焉は間近いのだ。・・・・そのときこそ賭けてもいい，人間は波打ちぎわの砂の表情のように消滅するであろうと」[48]。無から新たに生じた人権も，やがて顧みられなくなること，必定だという話しである。

現代のエピステーメーについては，フーコーはその到来を予感しながらも[49]，特定には至らないまま昇天した。**図表2**における「？」は，そうした状況を含意している。

先述のとおり，人間の言語における意味はすべて，〈恣意的〉である。意味のルーツは，〈自然的〉でも〈非人為的〉でもない。言語の意味が「恣意的」であるというのは，意味のルーツが人為的，すなわち，歴史的，社会的，もしくは文化的であるとの言明である[50]。それゆえ，人間の言葉の意味

48）フーコー（渡辺・佐々木共訳），前掲『言葉と物』，409頁。
49）今村仁司・栗原仁，『フーコー』，清水書院，1999年，90～91頁，95～96頁。
50）丸山，前掲『ソシュールを読む』，125頁。

には，もともと如何なる根拠もなく，時間的にも空間的にも，常に可変的である。言語の意味はこれを本性としている。

現に，「語の意味を考えるとき，現在使用している語の意味と，私たちの祖先が使用していた語の意味とが違っていることに気づく。アシタは今では『明日』の意味であるが，『万葉集』では『朝』の意味であった。『源氏物語』葵の巻には『夫が宿泊していった翌朝』の意味がある。オモシロイという語の意味も『万葉集』では『気持ちが晴れやかで見て楽しい』の意味であったのが，江戸時代から『こっけいな，おかしい』の意味になって現在に及んでいる」[51]。これら以外にも，言葉の意味変化例は，数限りなく見出せよう。

人間の言葉である「複式簿記」，単語としてのその意味もまた，一定不変ではありえない。時代や社会に相対的でしかない。ところが，友岡になる「複式簿記」の定義（概念規定）によれば，「結局のところ，取引のもつ二面性ゆえの複式記入を不可欠の要素とする資本と利益の記録システム，これが複式簿記なのである」[52]とされている。これ自体は，学界の現下多数説に見合っており，要を得た定義にも見える。

ただ，もし，この定義こそ「複式簿記」そのものに対する最適にして時間的にも不変の概念（意味）規定であると主張するのであれば，当該規定概念はプラトンのイデア（原型）に相当する。そして，その背景をなす知の準拠枠を問うのであれば，実在論ということになる。言葉の意味変化に際会して，「時間的に不変の絶対的存在」としてのイデアは不確実となる。ひいては，実在論の根拠も危ういものとなってしまう。

友岡がジェーンらの著作を引用して言うところによれば，複式簿記の嚆矢は，ダティーニ 1390 年以降とのことである[53]。友岡の中で，その後，「複式簿記」という言葉の意味（定義）に変化がなかったとすれば，複式簿記は爾来こん日まで 600 年を超える命脈を保っていることになる。

51）堀井令以知，『日常語の意味変化辞典』，東京堂出版，2003 年，はしがき 1 頁。
52）友岡賛，『会計の歴史』，税務経理協会，2016 年，65 頁。
53）友岡賛，『会計学の基本問題』，慶應義塾大学出版会，2016 年，105～106 頁。

人間を造物主とする恣意的な言語記号でありながら，1つの単語（たとえば「複式簿記」）で，600年を超えて文脈的に意味の変わらない言葉が存在する，というのは現実的な話しであろうか。「複式簿記」でなくても構わない。他に，600年超も文脈的に意味不変の単語が，何かどこかに存在するとでも言うのであろうか。あれば，教えを請いたい。

唯言論は，単語に対し個別不変の意味など認めない。意味は，連辞関係と連合関係がクロスするところで相対的に決定されると見る。言い換えれば，意味は常に変動的で，文脈（コンテクスト＝関係）次第であると考える。

ここで，友岡の定義を唯言論的に解析すると，以下のようになろう。すなわち，友岡の定義にいう，二面性による「複式記入」は，ソシュール言語学でいう連辞関係（文法）に通じている。また，「資本」や「利益」という概念は，ソシュール言語学でいう連合関係（語彙）に通じている。

ただ，人間の言語において，連辞関係（文法）は連合関係（語彙）に比べて，変化に対する抵抗力が大きい[54]。前述のとおり，「アシタ」や「オモシロイ」をはじめ，意味変化した日本語語彙（連合関係）は多いが，その間，日本語文法（連辞関係）には基本的な変化はなかった。それにも明らかである。

もっとも，会計言語の場合でさえ，貸借の複式記入（連辞関係）が〈上下連続式〉から〈左右対称式〉へと変化した歴史もある[55]。それゆえ，言語の連辞関係（文法）とて，必ずしも永世不変ではない。ただし，変化はあっても，連合関係の変化と比較すれば，非常に少ない。片や複式記入（連辞関係）は等しく左右対称式のままであっても，連合関係（語彙）の構成要素をなす「資本」や「利益」という言葉（単語）の意味変化は，その間はるかに可変的であった。

たとえば，収益費用観の下では，「資本」は評価損益除外を含意していた。また，「利益」はいわゆる『当期純利益』を意味していた。当該両概念は，

54）前田満，「意味変化」，中野弘三編，『意味論』所収，朝倉書店，2012年，106頁，130頁。
55）渡邉，前掲『帳簿が語る歴史の真実』，59頁。

資産負債観の下では，「資本」は評価損益算入を含意するようになった。そして，「利益」はいわゆる『包括利益』を意味するようになった[56]。こうした変化を看取すれば，連辞関係と比較しての連合関係における可変度の大きさも，おのずと明らかであろう。

以上のように，「複式簿記」という言葉の意味は，友岡のように実在論を背景（知の準拠枠）とする場合には，ダティーニ以来600年以上にもわたって一定であった（変化がなかった）かのように見える。しかし，我われのように唯言論を背景（知の準拠枠）とする場合には，あらゆる言葉の意味は一定でなかった（変化があった）と見られる。

友岡にして，「複式簿記」という言葉のなかったダティーニ1390年当時の帳簿を『複式簿記』と観ずるのは，イデア（実在論の記号観）にとらわれた発想に由来している。そのように見受けられる。

前述のとおり，「蝶」と「蛾」，「犬」と「狸」の識別は，日本語に存在してフランス語には不在である。日本語における2様の2語とも，フランス語ではそれぞれ1語（「papillon」ないし「chien」）である。こうした日本語とフランス語との間の違いは，言わば日仏両種言語体系における「空間的な相違」である。

他方，「複式簿記」という言葉が存在する『近時の帳簿事情』下においては，言語体系内に「複式簿記」と「単式簿記」が併存している。『ダティーニ1390年当時の帳簿事情』下においては，「複式簿記」も「単式簿記」も言語体系内には存在していなかった（不在であった）。これら近時と往時との帳簿事情の違いは，言わば今昔両種言語体系における「時間的な相違」である。

ここで時間次元を空間次元に投影して換言すれば，『近時の帳簿事情』は日本語2語空間に重なり，『ダティーニ1390年当時の帳簿事情』はフランス語1語空間に重なることであろう。「複式簿記」という言葉に対する友岡の語法に見えるのは，今昔異種帳簿事情の目こぼしである。帳簿事情の今昔差

56）同上，175頁，177頁。

異を度外視し，近時の言語空間で存在するにすぎない『複式簿記』という概念を，不用意に往時の帳簿（複式簿記不在）事情に付会してしまっている。これは，フーコーが戒めた「回顧的な読み方」（後述）にそのまま該当する認識であろう。

人類に果たした複式簿記の貢献度を評定するにあたって，両論（実在論および唯言論）のいずれが背景（知の準拠枠）として説得的であるのか。その判断は，後世の会計人に委ねるしかない。しかしながら，少なくとも，「複式簿記」という言葉のイデア的な意味を一定不変とみる見方だけが正当とは言えない。この点は，本節の議論で，明らかとなったのではあるまいか。

他方，渡邉の認識によれば，「複式簿記の本質は，資本計算，言い換えると損益計算にあると考えている。取引を記録しその記録にもとづいて利益を計算する。これが複式簿記である」[57]。引用文中における「本質」の意味は，本稿始まりの部分で既述した，プラトンのいう「イデア」（原型）としての意味と解される。知の準拠枠が実在論であることは，友岡と変わらない。

ここで渡邉や友岡に対し改めて問いただしたいのは，「複式簿記」という単語の意味である。渡邉や友岡の，一見説得的に見える実在論的定義（意味）にせよ，学界における統一的見解とも言えない。他にも種々の定義がありうる。中野を中心とする実証研究でも明らかである[58]。

「複式簿記」の定義がかくも多様であること自体，「複式簿記」という言葉（言語記号）の意味が，単語の中にはなく，むしろ文脈（当該単語とその他諸語との関係）次第であることを物語っている。渡邉や友岡による定義法は，一途に単語を志向している。文脈志向の周到さを欠いている。渡邉や友岡の定義法におけるプラトニズムは，いよいよ明らかである。が，この点は，今は不問とし，先を急ぐ。

渡邉は13世紀初めのヴェネツィア式簿記やフィレンツェ式簿記，15世紀末のパチョーリ著述になる簿記，その後の期間損益計算簿記も含めて，それ

57）渡邉，前掲『帳簿が語る歴史の真実』，45頁。
58）中野常男編著，『複式簿記の構造と機能』，同文舘，2007年，41～42頁。

ら帳簿を「複式簿記」と総称している。ただ，総称「複式簿記」に内属する各種簿記相互間には，それぞれに個別的な相違点もあったと思われる。換言すれば，それぞれに固有の特徴もあったと思われる。にもかかわらず，当該各種簿記の中に共通した公約数的な原型（イデア）の存在を発見（想定）し，渡邉はそれに「複式簿記」との総称を与えた。そのように見られる。

それ以来，「複式簿記」は当該名称そのものには変更が加えられない範囲で，紆余曲折をへて今に至っている。渡邉は今日においても，会計の第一義的機能は「信頼性」にあるとし，昨今流行（はやり）の「有用性」機能よりも重視している[59]。それは，14 世紀前半に完成した当時における総称「複式簿記」の原点が，信頼性の確保にあったからだとする認識に発している[60]。

だが，「複式簿記」とて，人間により作られた恣意的な言葉にすぎない。人間の言葉の意味は，移ろいやすい。「複式簿記」の意味とて，歴史的な〈原点〉のみで固定されるものではない。むしろ，大きくは移り気な〈権力〉により幾たびも改変されるものである。客観的（欧米多数的）には，会計の役割は近時，「信頼性」から「有用性」へと重点が移動しつつある。そうした時流に対し，我われは近代から現代への権力変転の影を見るものである。

この見方に見落としがないとすれば，時流に逆らう渡邉学説は，権力の動向に逆らう主張に通じている。現在の価値観で過去を回顧する者は，現在の価値観で未来を展望してしまいがちである。自身のプラトニズムを克服できない限り，渡邉説は不首尾に終わる公算大である。時期は特定できないが，事態の推移（成り行き）が，それを証明すると見られる。事の善し悪しは別として，これが我われの展望である。

Ⅴ．宗教的表現に対する回顧的読み方

さて，本稿冒頭オリーゴからの引用文中には，「慣例」という言葉があった。それは，「惰性」とほぼ同義であろう。また，パチョーリ自身になる簿

59）渡邉，前掲『帳簿が語る歴史の真実』，141～142 頁。
60）同上，63 頁，153 頁，158 頁。

記論についても，「煩わしくなるくらいまで」宗教的な色彩が濃厚に頻出していた，という論評がある。片岡義雄の研究である[61]。「慣例（惰性）」と言うも「煩わしくなるほどの頻出」と言うも，中世複式簿記帳簿に見られた宗教的表現は，「帳簿の中身には直接的な関係はなく，もっぱら表現上のレトリック」という思いからであったろう。

レトリックの卑近例として，日本語に「宿題の山」とか，「彼こそスターだ」といった表現がある。レトリック（比喩）という言葉は，一般に『文字どおりの意味ではない』ということを含意している。たとえば，「宿題の山」という言葉は，文字どおりの『山』（mountain）とは直接的な関係はない。『比喩的な山』という意味である[62]。

三木清に参照しても，レトリックは，存在（現実）との内的な繋がり（関係）を失ったところで成立する[63]。じっさい，「宿題の多いこと」と「山」とは，直接的には無関係である。「彼」と「スター（星）」も，直接的には無関係である。レトリック（比喩）というのは，「言葉のちょっとした言い回し」であり，ありきたりの表現ではなく，より説得的な表現，より魅力的な表現のことである[64]。

レトリック（比喩）は，よい意味では，「ことばの表現を工夫して，聴衆・読者の説得や感動を効果的に生み出す技術である」[65]と見られている。また，悪い意味では「言語（言葉）の単なる装飾」[66]とも受け止められる場合がある。

ところで，言葉による「表現」には，一般に「対話の相手」（対話者）というものが存在する。言い換えれば，その表現は，「誰に向けてのメッセー

61）片岡義雄，『パチョーリ「簿記論」の研究』〔増訂版〕，森山書店，1965年，284頁。
62）瀬戸賢一，『日本語のレトリック』，岩波書店，2002年，iii頁。
63）三木清，「解釋學と修辭學」，『三木清全集』第五巻所収，岩波書店，1967年，143頁。
64）瀬戸，前掲『日本語のレトリック』，iii～v，5～17頁。
65）吉田正岳，「レトリック」，尾関周二ほか編，『哲学中辞典』所収，知泉書館，2016年，1319頁。
66）菅野盾樹，『新修辞学―〈反哲学的〉考察』，世織書房，2003年，30～31頁。

ジか？」という話しである。「独り言」のように，まれには表現者と対話者とが同一人というようなケースもありうる。しかし，たいていの対話者は，表現者に非ざる他の地上人であることが普通である。

上に見た宗教的表現レトリック説の場合，対話の相手として想定されているのは，おそらく「表現者（記帳者）とは別の，第三者（他の同じ地上人）」であろう。まさか，天上におわす神様ではなかろう。もし，神様が対話者であるとするならば，上の宗教的表現は「レトリック」ではなく，むしろレトリックに非ざる「平常の表現」[67]（「文字通りの意味として理解される表現」[68]）ということになる。

もし，神様（存在するとして）が対話者であるならば，言葉など，飾る必要はあるまい。もっぱら正直にありのままを表現すれば（申告すれば），足りよう。言葉（表現）をいたずらに飾ったり，あるいは嘘をついたりしても，神様には無駄である。神様なら，すでに真実をすべてお見通しだからである。

したがって，宗教的表現レトリック説における対話の相手は，神様（天上人）ではなく，第三者（他の同じ地上人）が想定されている。このように推理してはじめて，中世イタリア商人たちの複式簿記帳簿において，至るところで見られたという宗教的表現は，「平常の表現」（写像表現）ではなく，「レトリック」（比喩）だったということになろう。こうした推理が，学界における定説の根拠であろう。見方によれば，しごく当然な立論にも聞こえる。

渡邉によれば，複式簿記を誕生させた第一義的要因は信用取引であり，そのさい帳簿の正確性を担保するために神の力を借りていたとされる[69]。神への誓いの言葉（宗教的表現）が帳簿から消えていくのは，16 世紀後半から 17 世紀に入ってからであるという。それは，「神に誓わなくても帳簿の記録が十分に信頼されるものであることが広く認知されたからであろう」と推論

67）佐藤信夫，「比喩」，下中直人編，『世界大百科事典』，第 24 巻，81 頁。
68）山梨正明，『比喩と理解』，東京大学出版会，1988 年，49 頁，183 頁。
69）渡邉，前掲『帳簿が語る歴史の真実』，20 頁。

されている[70]。

果たしてそうか。その後18世紀南海泡沫事件ほか，帳簿記録の信頼性認知を貶める会計不正の事例はおびただしく，今日に至るも絶えていない。一度は消失した宗教的表現が，また再び帳簿記録に復活しても，何ら不思議でない。会計不正は，それほどに多い。ならば，宗教的表現が現代のキリスト教社会においてさえ，復活していないのは何ゆえか。この点に鑑みれば，我われは，渡邉の推論に首肯できない。

神への誓いの言葉が消失したのは，帳簿記録に対する信頼性認知によるものではなかった可能性が高い。むしろ，エピステーメー（知の準拠枠）における変転が原因でなかろうか。すなわち，中世的認識から古典主義時代的認識への変転が原因でなかろうか。これが，我われの所見である。

「浜の真砂は尽きるとも，世に会計不正の種は尽きまじ」。我われの率直な心象である。ビジネスの世界では，今日に至るまでばかりでなく，将来にわたっても，会計不正は尽きることがあるまい。そう思われる。なぜなら，会計言語も人間の言語（言語記号）だからである。人間の言語の特性は，自然的（非人為的）ではなく恣意的（人為的）だからである。それゆえ，人間の言語は動物（人間を除く）の言語とは違って，嘘（うそ）がつきものだからである。「人間の言語（言葉）は，ウソをつくために発明されたにちがいない」。そうした説（E. H. スタートヴァント）さえ既にある[71]。

宗教的表現レトリック説に対する反証のために，我われはここでジェィコブ・ソール（Jacob Soll）の主張を援引したい。彼によれば，「教会法で金貸業が禁じられていた14世紀のイタリアでは，商人と銀行家は常に罪の意識に苛まれていた。だが，最後の審判を恐れるその信仰心こそが，会計を発展させたのだ。彼らの秘密帳簿は，それを示している」[72]。

70）同上，59頁。
71）T. A. シービオク（池上嘉彦編訳），『自然と文化の記号論』，勁草書房，1985年，58～59，122頁。
72）ジェイコブ・ソール（村井章子訳），『帳簿の世界史』，文藝春秋，2015年，39頁。

イタリア・プラート出身のダティーニは，パチョーリの著作に100年ほども先んじて，14世紀末には「複式簿記」により巨富をなした。諸家により，そのように伝えられている。彼は「大きな本（libri　grandi）」と呼ばれた総勘定元帳の他にも，小口現金出納帳ほか各種の帳簿をことこまかに記帳していた。加えて，それらすべての帳簿を総括する一冊すなわち「秘密の本（libro segreto）」も保持していた。

ちなみに，この秘密の本は，ダティーニに限らず「中規模以上の商人は，まずまちがいなくこの秘密帳簿を用意していた。これは帳簿と日記を兼ね備えたもので，お金に関して真実を告白できる唯一安全なスペースだった。ダティーニはここに真実の（そして多くは税金を免れた）取引を記録している。・・・・秘密帳簿には事業の最終決算も記入されているが，それは往々にして元帳の公式の集計と一致しない」[73]。

ソールは言う。「今日では想像しがたいことだが，中世の銀行家や商人には罪の意識がまとわりついていた。・・・・富と信心の両方を追求する中世の商人にとって，利益は悩ましい問題だった。中世イタリアの商人は帳簿をつけてはいたものの，『最後の清算』を行うのが人間でないことを片時も忘れたことはない。それをするのは神である。とはいえ人間には善行をすることができたし，それは神の審判を受けるときに備えて大いに意味があると考えられた。罪は善行で埋め合わせられる，というわけだ。教会も積極的にそれを後押しした。罪は会計と結び付けられ，むしろ罪なしには会計の発展はなかったと言えるほどである」[74]。

いわゆる「二重帳簿」は，中世イタリア商人たちの場合も常習であった。再びソールを引けば，「商人にとって，帳簿を二組つけることはかんたんなことだ。『残念ながら，帳簿を二組用意して，片方を買主に，もう一方を売主に見せる商人が大勢いる。さらにひどいのは，帳簿が正しいと神に誓いながら，嘘を記入することだ』。会計担当者でさえ，ひんぱんに，それどころ

73）同上，46頁。
74）同上，49～50頁。

か組織的に，秘密帳簿をつけ，徴税官の目から実態を隠した。ダティーニもコジモ［ダティーニ後の中世イタリア豪商；執筆者注］もそうしていた。パチョーリは，帳簿をつける者はイエスの名を思い出すように，と忠告する。『あらゆる取引はイエスの名の下に行うべき』であり，そのために帳簿には十字の印を入れておくとよいという。もっともダティーニもコジモも秘密帳簿に十字を入れていたのだが。ダティーニのモットー『神と利益の名において』は，そもそも公明正大とごまかしの両方に与(くみ)していると言わざるを得ない。パチョーリは，若い時から健全な信仰心をもって専門的な教育を受ければ，秩序正しく高潔な会計を実践できるようになると期待した」[75]。

「最後の審判を恐れるその信仰心こそが，会計を発展させた」，「ダティーニのみならず，中規模以上の商人には，まずまちがいなく保有されていた秘密帳簿にも，十字が書き入れられていた」というソール説の論意から，我われは何を汲みとることができるのか。中世イタリア商人の複式簿記帳簿に記入されていた宗教的表現（神への誓いの言葉）は，かならずしも第三者（他の同じ地上人，いわゆる利害関係者）向けのレトリックに限定される内容ではなかった，これである。

ソール説にいう「公式の集計」すなわち「公式の帳簿」において記された宗教的表現は，当然に第三者（他の同じ地上人）の目にも触れる。それゆえ，レトリックとしての作用がありえたこと，その可能性は否定できない。しかし，そうした意義は，あったとしても〈従〉（sub）としての位置づけとなろう。ただに神の権威を拝借せんとするレトリック（比喩）ではなく，一心に神に命乞い（天国行き）を祈願する平常の表現であった。むしろ，この意義が〈主〉（main）であったと思われる。

復誦すれば，宗教的表現は，第一義的には，神（天上人）を直接の対話者とする「平常の表現」（写像表現）であった。むしろ，そうした意義が，複式簿記をはじめとする会計の発展（あったとすれば）を可能ならしめた。ソール説から得た我われの〈読み〉である。

75）同上，102頁。

ソール自身の言語観は，彼の論述のコンテクストからして，学界大勢のプラトニズム（実在論＝言語命名論）と軌を一にしている。明らかに，ソシュールらの構造主義言語観（唯言論）とは，異次元である。しかし，それでも渡邉らの多数説に対抗する内容をなすソールの時代考証は，フーコーの中世エピステーメー論をしかと裏付けている。我われの見立てである。

地の如何（知の準拠枠）は，図の見え方（理論）に大きな影響を及ぼす。しかし，地は図をパーフェクトに決定してしまうまでには至らない。地に完全捕獲されない図も，常に可能である。従来の通説に埋没しておらないソール説は，そのことを示している。

パチョーリが 1494 年に『スムマ』を著したのは，地中海自治都市ベネツィアにおいてであった。フーコーになる時代区分（**図表 2**）に照らせば，「中世」であった。当時のエピステーメーは「類似」であり，その言語観は拙稿においていう「意味類似観」であった。我われは先ずこの点を押さえておいて，次に進もう。

片岡によれば，パチョーリの簿記論においては「煩わしくなるくらいまで」宗教的な色彩が濃厚に頻出していた。上掲のとおりである。しかし，「煩わしいほど」との表現に対し，我われにはパチョーリと片岡とで，知の準拠枠に相違が看取される。パチョーリの中世に対する片岡の近代である。

ソールからの引用文中に明らかなごとく，パチョーリにあっては，イエスへの一途な信心のみが滲出している。己の富と信心との〈板ばさみ〉に悩んだ，ダティーニら商人たちとは，異なる身の上であった。パチョーリには，神の権威を借りて，己をよく見てもらおうといった下心など，いっさい無縁であった。

片岡説には「後講釈」の臭いがただようのである。じっさい，パチョーリは，数学者でありフランチェスコ派の敬虔な僧侶であった。彼には，『スムマ』において自身が推奨した宗教的表現に対して，「煩わしい」ものとか「神の権威を借りたレトリック」とかと評されることは，心外であろう。ここで，もし「さにあらず」となす会計史家あらば，我われはその根拠につき

教えを請うものである。

古典主義時代や近代の真理観により，中世の真理観を批判しても始まらない。無益であろう。たとえば，地動説を真理とみて，天動説を批判してもほとんど無益である。あるいは，相対性原理を真理とみて，ニュートンによる速度の加法性原理を批判してもほとんど無益である。相対性原理生みの親・アインシュタイン自身の言明にもある。「数学の法則が現実にあてはまるとしたら，その法則は確かなものではない。数学の法則が確かなものである限り，現実にはあてはまらない」[76]。

「地動説が正しく，天動説は誤り」とするのが，天文学における今日の常識（真理）である。もっとも，そうした真理観の下でも，「太陽は東から昇り，西に沈む」という天動説的言明は，日常，事もなく繰り返されている。そうした言明は，人びとの間でのコミュニケーションにおいて有用であれば（役に立っておれば），今日においてなお存在価値があろう。速度の加法性原理また，人びとの日常的な用途に間に合っておれば有用であろう。唯言論的に見て，人間の生活にとっていっそう重要なのは，認識の真理性よりも方便の有用性である。

唯言論によれば，「言葉なくして認識なし」。ダティーニの時代には，「複式簿記」などという言葉はなかった。言葉がなければ認識はなく，認識がなければ存在も不明である。それゆえ，「ダティーニが『複式簿記』を利用して巨富の財をなすのに成功した」という学界における諸説はすべて，フーコーが戒めた「回顧的な読み方」[77]に嵌まった暴論である。

ついでながら，オリーゴによれば，ダティーニの頃でさえ，プラートの商人たちは6人中4人まで帳簿を持っていなかった。しかし，これを逆に言えば，6人中2人は帳簿を持っていたことになる。ただし，当該帳簿は，「イ

76）ポール・ストラザーン（浅見昇吾訳），『90分でわかるフーコー』，青山出版社，2002年，66頁。
Albert Einstein, *Sidelights on Relativity*（New York：Dover Publications, Inc., 1983），p. 28.
77）フーコー（渡辺・佐々木訳），前掲『言葉と物』，187頁。

タリア式」（オリーゴやソール，友岡や渡邉らにいう「複式簿記」）に非ざる帳簿であった。「現金取引の記録もなく，債権の覚書の域をほとんど出ないものだった」[78]とされる。

我われの見解では，ダティーニらの「秘密帳簿」における宗教的表現は，神を対話者とするものであった。明らかに，第三者（地上人）を直接の対話者とする意図はなかった。それゆえ，「秘密帳簿」における宗教的表現には，第三者向けの権威主義的なレトリックなどいっさい不要であった。

これに照らせば，イタリア式の「秘密帳簿」にまで宗教的表現があった以上，「非イタリア式帳簿」にも同種の宗教的表現（神への誓いの言葉）が記されていたであろうこと，想像に難くない。この点もまた，従来の諸説には言及のなかった，本研究独自の推理である。

Ⅵ．むすび

以上の小考につき，我われなりの結論を要約して示せば，次のとおりである。

（1）会計理論の前提として，最基層で知の準拠枠をなす認識＝存在論については，実在論・観念論・唯言論の３種が識別される。理論の前提としては，いずれも形而上学的命題である。言わば，偏見にすぎない。しかしながら，実在論者や観念論者には，そうした自覚はない。彼らには，自身の前提は偏見に非ず，形而下的にも正当と確信されている趣きが濃厚である。この点，知の準拠枠における形而上学的自覚の有無については，彼我に明確な相違がある。

（2）会計言語における「複式簿記」というコトバの意味も，一定不変ではありえない。時代や社会に相対的でしかない。「複式簿記」に対する代表的な定義として，「取引のもつ二面性ゆえの複式記入を不可欠の要素とする資本と利益の記録システム」という概念規定が見られる。この定義にいう，二面性による「複式記入」は，ソシュール言語学でいう連辞関係（文法）に通

78）オリーゴ（篠田訳），前掲『プラートの商人』，140～141 頁。

じている。また，「資本」や「利益」という概念は，ソシュール言語学でいう連合関係（語彙）に通じている。

(3) 人間の言語において，連辞関係（文法）は連合関係（語彙）に比べて，変化に対する抵抗力が大きい。しかし，貸借の複式記入（連辞関係）が上下連続式から左右対称式へと変化した史実もあるので，会計言語の連辞関係（文法）とて必ずしも不変ではない。ただ，変化はあっても，連合関係の変化と比較すれば，非常に少ない。片や，連合関係（語彙）の構成要素をなす「資本」や「利益」といった単語の意味は，歴史的に見てもはるかに可変的であった。

(4) 13世紀初めのヴェネツィア式簿記やフィレンツェ式簿記，15世紀末のパチョーリ著述になる簿記，それ以降の期間損益計算簿記，それら相互間には，記帳法の点で，個別具体的な相違点（特徴）も多々あったと思われる。にもかかわらず，学界の大勢としては，当該各種簿記の中に共通した公約数的な原型（イデア）の存在を発見（想定）し，それを根拠に等しく「複式簿記」という総称を与えてきた。プラトニズムになる実在論的な言語観そのものである。

(5)「複式簿記」も，人間により作られた恣意的な言葉にすぎない。その意味は，歴史的に不変ではありえない。移り気な〈権力〉により改変されるものである。近時，会計の役割について，「信頼性」重視から「有用性」重視への重点移動が見られる。そうした時流の背景に，我われは近代から現代（ポスト近代）への権力変転の兆しを見る。こうした時流に逆らう信頼性重視の研究も，存在する。が，そうした研究は権力の動向に逆らう主張に通じ，プラトニズムを克服できない限り，不首尾に終わる公算が大きい。

(6) 中世イタリア商人による複式簿記帳簿の冒頭には，ほとんどかならず宗教的表現（神への誓いの言葉）が見られたという。それが16世紀後半以後，俄かに消沈したのは，帳簿記録の信頼性認知度向上によるとの，有力説がある。果たしてそうか。信頼性認知度の向上ではなく，むしろエピステーメー（知の準拠枠）における変転が原因である。すなわち，中世的認識から

古典主義時代（近世）的認識への変転が原因である。これが，我われの所見である。

（7）ソール説にいう「公式の帳簿」において記された宗教的表現は，当然に第三者（他の同じ地上人）の目にも触れる。それゆえ，「レトリック」としての意義が多少ありえた可能性は否定できない。しかし，そうした意義は，あったとしても〈従〉としての位置づけとなろう。宗教的表現の真意は，神の権威を拝借せんとのレトリック（比喩）ではなく，神に命乞い（天国行き）を祈願する，メタ言語次元での「平常の表現」であった。むしろ，この意義が〈主〉であったと思われる。

（8）唯言論によれば，「言葉なくして認識なし」。14 世紀末のダティーニの時代には，「複式簿記」などという言葉はなかった。言葉がなければ認識はなく，認識がなければ存在も不明である。それゆえ，「ダティーニが『複式簿記』を利用して巨富の財をなすのに成功した」という学界における諸説はすべて，フーコーが戒めた「回顧的な読み方」にはまった暴論である。後世のエピステーメー（知の準拠枠）からする，前世評価の「後講釈」にすぎない。

（9）ダティーニらの「秘密帳簿」における宗教的表現は，神を直接の対話者とするものであった。第三者（他の同じ地上人）を対話者とする意図はなかった。それゆえ，「秘密帳簿」には，もともと第三者に対する権威主義的なレトリックなど不要であった。これに照らせば，「秘密帳簿」にまで宗教的表現があった以上，「非イタリア式帳簿」にも同種の宗教的表現（神への誓いの言葉）が記されていたであろうこと，想像に難くない。これは，従来の諸説には言及のなかった，本研究独自の推理である。

［以上］

（ちょん・じぇむん／本学名誉教授／2018 年 8 月 27 日受理）

Religious Rhetoric in the Birth of Double Entry Bookkeeping

CHUN Jaemoon

The conclusions reached in this paper are summarized as follows:
(1) As for the premise of accounting theory, three kinds of existence and recognition views that form the knowledge base of frame of reference at the top layer, are able to be identified: realism, idealism, and lingualism. As for the premise of theory, all of them are metaphysical propositions, so to speak, they are just biases. However, realists and idealists do not have such self-consciousness. The signs are rich that they have no bias and their own theories are physically right. In this regard, there is a clear difference between them and us whether metaphysical awareness about the frame of reference is possessed or not.
(2) It is said that at the beginning of double entry bookkeeping books by medieval Italian merchants, religious expressions, and oaths to God were almost always seen. There is a leading theory that it suddenly disappeared in the latter half of the 16 th century, according to the improvement of reliability of their book records. Is that so? Rather than raising recognition of reliability, it may be caused by the change in épistémè (frame of reference). In other words, it may be caused by the change from medieval recognition to classicalism age recognition. This is our finding.
(3) According to *lingualism*, "no recognition is without word". In the days of M. Datini at the end of the 14 th century, there was no word such as "double entry bookkeeping". There is no recognition if there is no word and the existence is unknown if there is no recognition. Therefore, many theories that Datini succeeded in making big property using "double entry bookkeeping" are groundless arguments of "retrospective reading" that Foucault admonished.

(4) God (a heavenly person) was a direct dialogue partner of religious expression in “secret books” by M. Datini et al. The third party (an earthly person) was not a direct dialogue partner. Therefore, authoritarian rhetoric for a third party was unnecessary in “secret books”. In light of this, it seems that the religious expression of the same kind (the words of oath to God) was also written in “non-Italian books” as there was religious expression in “secret books” of double entry bookkeeping. This is also the original reasoning of this paper which has not been mentioned in the preceding theories.